

学生訪問記 世界に触れる

山本正

日本国際交流センター理事長

〔聞き手〕

上智大学

大橋勇太、藤木彩也佳、藤田美夏海、

廣瀬亜美、若原宏和

連載①



国際交流の草分けが語る 「カタリスト」の醍醐味

政府から個人レベルまで「国際交流」があふれている現在。しかし、いまから四〇年前、それほど一般的でなかったこの言葉を堂々と組織名に冠し、日本国際交流センター（JCIE）は誕生した。創設者であり、いままも理事長として組織をリードしている山本氏の思いとは。

やまもと ただし

一九三六年生まれ。上智大学を経て、米セント・ノールバート大学卒業、マーケティング大学院より経営学修士号取得。一九七〇年に財団法人日本国際交流センターを設立。三極委員会のアジア太平洋ディレクター、日英二世紀委員会、日独フォーラム、日韓フォーラムの幹事委員、世界基金支援日本委員会ディレクターなどを務める。おもな編著書に『官』から『民』へのパワーシフト 誰のための公益か』『戦後日米関係と「ライオンロビー」』はか多数。

踊るといふか、高揚感がありましたね」

山本さんはカトリックの一家に生まれ、信仰の中に育った。上智大学入学後、奨学金を得て米ウイスコンシン州の大学に留学したことで、転機が訪れる。時は一九五八年。「その時期のアメリカというのは、ケネディが颯爽と登場してきて、大きな変化を感じさせる時代でした。血湧き肉

「政治だけじゃない。私が親しんでいたキリスト教もそうでした。第二バチカン公会議があつて、教会が自由で、開かれたものへと一新したのです。シカゴ郊外のある教会を訪れ、ミサを見たときの衝撃はいまでも忘れられません。

神父たちが会衆の側を向いて、それまではラテン語でわけのわからないことを唱えていたのが全部英語になって、そして賛美歌のときは聖堂自体が歌っているんですよ。これだ！と思いました。まさにラブ&コミュニティ。自分は神父にはならないけど、こういう社会を変えていく仕事をしたいと、心に決めました」。

山本さんは大学院もアメリカで学び、一九六二年に帰国する。「日本のために働きたい」という気持ちを抱いての帰国で、間もなく国際交流の仕事に携わることになる。きっかけは、ロバート・ケネディ氏の訪日を企画していた小坂徳三郎さん（信越化学社長、後に衆議院議員）との出会いだ。財界人小坂さんのパーソナル・アシスタントとして、語学に堪能な山本さんは交流組織「国際親善日本委員会」を切り盛りすることになる。

なかでも有名なのが、一九六七年に第一回目を開催した下田会議だった。日米の政策対話、知的対話をプロモートする会議だ。「とにかく外との関係の旗頭として何でもやってくれと言われていました。そこで、政府の枠を超えて政治家、学界、財界から選りすぐりを集めました」と山本さんは語る。下田会議は以降九四年まで続いた。

しかし、やがて次の転機が訪れる。小坂さんの政界進出

である。山本さんは決断する。「政治の助けをするつもりはない。彼のおかげでここまでこれたにもかかわらず、辞表を出しました」。そして一九七〇年、独立して国際交流を専門とする民間組織の日本国際交流センター（JCIIE）を立ち上げるようになった。苦労も多かったようだが、時々のお会いが山本さんに力を与えていた。「ソニーの井深大さんと出会ってアメリカ航空宇宙局（NASA）と関わるきっかけができたり、ついてましたよ」。

知的交流といっても、戦後日本の成長とともに、そのテーマは変化していった。

「追いつき追い越せが終わって、七〇年代には日本はサミットに加わるまでになった。しかしそれと同時に、政治家も、官僚も、日本のことだけでなく、世界のことにも目を向けなくてはならなくなった。世界の課題はめまぐるしく変わります。その頃はHIVなんて考えもしなかった。いま一番力を入れている仕事の一つは、途上国における三大感染症（HIV／エイズ、結核、マラリア）の問題です」

「対象地域を考えても、以前は日米関係だけで済んだのが、東アジアの重要性が増し、感染症などの問題はアジアのみならずアフリカにまで広がりました。グローバルな時代に、



公益財団法人 日本国際交流センター

〒106-0047 東京都港区南麻布 4-9-7

JCIE の活動については、

URL <http://www.jcie.or.jp/japan/> に詳しく掲載されている。

日本はどのような知恵が出せるのか。日本の役割は大きいはずですが……」

一方で、長年の仕事である日米交流にも新しい展開が生まれた。今年二月に開催された「新下田会議」がそれだ。「政府も関心を持ってくれて、前原外務大臣（当時）が七〇名の着席ディナーを開催してくれました。さらにワシントンでも、いままで一九六八年から始めている議員交流に参加してくれた累計二〇〇名以上の人たちと会議を行いました」

「私は、基本的には日米関係を見直そうという姿勢を打ち出しました。新下田会議にはアメリカから議員六名が来日しましたが、これは一九六八年以来最も多い。ジャパン・パッシングの時代から、明らかに潮目が変わっていると感じました。そうなった大きな要素は、やはり中国です。中国と比べて、自由主義経済や民主主義といった価値観を日米は共有しています。それを大切にして両国の協力関係を強化するべきだという雰囲気を感じました」

民間交流を通じて見つけたこのモメンタムを、今後も加速させたいという。

政府だけでなく民間をも巻き込んだ知的交流、今日流に言えばトラック2ということになろうか。なぜ山本さんは

「民間」にこだわりのだろう。

「それは、非営利・非政府だからこそできることがあるから。政府の人間はいろいろな政治的経緯にしばられて、自由が利かない。また官僚も前例踏襲が効かない時代になって戸惑っている。何か変化が必要なときは、市民社会、一般の国民を巻き込んでいかないと、動かないものです。逆にそれが動いたときのエネルギーはすさまじい。私がアメリカにいた四年間で学んだことは、そういうことでした」「別に政府とけんかしているわけでも、競争しているわけでもありません。われわれは、論議を促進するためのカタリスト（触媒）のようなもの。これが正しいからやりなさいという立場よりも、ある問題に対して、このように考えたい、これについてより多くの意見が必要で、サポートが不可欠だと助言をするような立場です」

非営利・非政府だからどうなんだ

山本さんは、さらにもう一つ付け加えた。

「非政府・非営利組織は、長期的な視点にたつて活動できます。政治の世界ではどうしても短期的な利益に目が向きがちです。たとえばこれだけ大きな国になった中国には、ぜひ国際社会の建設的なメンバーに加わってほしい。その

ときにわれわれみたいな組織が共通の関心を持ち、一緒にできることがあれば、ネットワークづくりになりますし、人によつては『公式見解』とは異なる本音の議論もできるかもしれません。そういうパイプを何本も準備しておくことが、長期的に見て日中関係を強化するためには必要ですよね」

一方で、国際交流を手掛けるなかで感じる不満もある。J C I E の財政は多額の寄付でまかなわれている。しかしつい最近まで日本には寄付に対する減税措置などはなかった。「果たして、このような組織を育てようという意識があるのか、疑問を持つことも少なくなかった」という。

最後に、この仕事のよろこびについて伺った。「それぞれの立場を超えて、一人の人間として打ち解け合えて、何か一緒にやろうとなったときは、それは楽しいですよ。外交というのは紙に文章を書くことだけでなく、その文章を支える根底のものが大切でしょう。それをつくるのが、われわれの仕事」。

一九三六年生まれ。われわれの祖父の世代である。数日前にアメリカ出張から帰ってきて、取材の翌日には、アフリカに旅立つ。まさに、国際交流のダイナミックさと魅力を体現する人物だ。■